

文献紹介：幕末の異国船来琉記と当時の琉球の状況—③—

—琉球大学附属図書館所蔵沖縄関係資料から—

豊平 朝美

ホールの著書1826年発行の第3版『琉球その他の東海航海記』には有名なナポレオン会見録が収録されている。その別版1840年版の『ジャワ、中国、大琉球航海記』(注1)には会見録の他にアンソンの世界航海記(1740-1744)やウィルキンスの伝記も収録されているが、初版のロンドン版にあった多数の挿絵が省略されている。ナポレオン会見録によると、ホールは琉球訪問後、英国へ帰国の途中、イタリアのセントヘレナ島に幽閉されているナポレオンを訪問する為に同島に立ち寄った。そこでホールはナポレオンに、①琉球には武器がないこと、②戦争をしたことがないこと等琉球についての報告をして、ナポレオンを驚かしている。さらに③琉球の住民は通貨の使用を知らない民で、物を与えても代償をとらないこと(注2)、④琉球では僧侶の地位が低いこと等も報告している。

ホールの琉球についての報告は、その後の外国人来琉記等でも取り上げられている。たとえばペリー提督の『日本遠征記』の中に、「琉球人は攻撃用武器に就いて無知を装っている。そして彼等はこのような物を公然と示すことはない(中略)。ベッテルハイム博士は、彼等の所有している火器を見たことがあると述べている。但し、彼等はその火器を外来者に努めて隠そうとしているとのことである。彼等は天性、平和的人民であることは疑いない。貨幣についていえば彼等は金銀の価値を大層よく知っている。そして彼等は中国銭で取引している」(注3)と記載している。

琉球の僧侶の地位については、ホールは「僧侶は社会において尊敬されていない。彼等は妻帯することも禁じられ、肉食することも許されていない。彼等と交際する住民は少ない。子供すらも彼等を嘲笑するのである。」(注4)と述べているが、「ペルリー日記」では「僧侶は支那の乞食坊主みたようななりはしているけれど、他の東洋諸国においてよりも多大の尊敬を持って待遇されている。」(注5)とホールと反対のことを述べている。

1827年英国船ブロッサム号で来琉したビーチ艦長の航海記に、「琉球においては、僧侶は中国におけると同じようにあらゆる階層の人々のために神託の相談を受けるのにかかわらず、非常に無視

され、見下げられている」(注6)と記されている。また、同書にも琉球で中国の銅銭が流通していることが触れている。

須藤利一はその訳著『異国船来琉記』の中で、「宣教師ベッテルハイムはキリスト教禁教令下の琉球で、布教活動等を行っていたことにより、たえず王府の役人の監視を受け、住民からも迫害を受けていたこと等でホールの琉球観に対して、否定的な見方をもっていた。幕末の駐日英国大使オールコックの著書『日本滞在の3年』の中に記載されているその時々政治によって影響を受けることの強い日本人の傾向を強く非難しているオールコックの言葉を引用して、ホールとベッテルハイム滞留時の島民の態度の差は(中略)この島民の性情と態度を変えた政治的状況の変化に対する認識がベッテルハイムに欠けていたこと等」(注7)を述べている。又、同書で、須藤利一は「ホールの貨幣及び武器に関する報告はある程度歴史的事実であって(中略)、当時の王府の役人が、琉球の現状を隠してホール側に伝えたことによる事も事実である。また、島民の礼儀正しさや、親切なことに関する記述も、誇張でもなければ、欺かれた結果でもない。たまたまホールが良い時期に琉球を訪問し、ある程度自由に島民と接触でき、島民の真情に触れることができた幸運の賜物であって(中略)、ホールの琉球記は、当時の琉球のありのままの姿を、かなり正確にしかも詳しく、初めて欧米人に紹介した貴重かつ興味深い文献である」(注8)とも述べている。

ペリー提督の日本遠征はホールの来琉から40年近く経ってから行なわれた。ペリーは日本を開国し、日米条約を締結するために、日本訪問に先立ち、日本と程遠くない位置にある琉球を艦隊の根拠地とする必要を認め、嘉永6年(1853)年5月26日、上海より、ミシシッピー号等4隻で、琉球那覇港へ寄港した。同年7月江戸湾に入り、徳川幕府と交渉したが、難渋を極めて、那覇へ引返した。1854年2月、再び江戸を訪問し、同年3月31日、遂に日米和親条約締結に成功した。琉球訪問以来那覇に入港すること5回に及んだ。その間、那覇泊での石炭貯蔵所の確保、沖縄本島周辺の水路調査、

奥地探検等を行なっている。

ペリー一行は1853年6月6日と1854年2月3日に2度首里城を訪問し、北殿に於いて歓迎式を受けたが、ペリーは幼少の国王尚泰に謁見することはできなかった。琉球王府は摂政宅と称して中城王子御殿（国王世子邸宅で現県立首里高等学校跡）でペリー一行を供応した。ペリーは1854年7月11日に琉球王府と琉米修交条約を那覇公館(天使館)で結び、所期の目的を達して、香港を経由して米国に帰還した。その際に琉球王府からペリー提督へ要請のあった英国宣教師ベッテルハイムを連れかえり、同師を香港で降ろしている。(注9)『ペリー提督日本遠征記』は米国合衆国ペリー提督指揮のもとに、1852年から1854年に亘って行なわれた米海軍の東洋遠征を収めた本で、3巻で構成されている。同書にはハイネやブラウンによる興味深い沖縄の風景画、人物画等多数収録されている。第1巻は、訪問した国々の人物、風物等記した一般的な遠征記録である。第2巻は遠征隊士官の調査に基づく寄港した国々の動植物、気候、風俗習慣、農業、地質、地図などの報告が収録されている。第3巻はミシシッピー号牧師ジョウンズ氏による天文学上の観測記録である。ペリー遠征記はペリー自身の日記をもとに、遠征に加わった多くの人々の記録を彼の友人、フランシス・ホークス氏によって編纂されている(注10)。その他、ペリー直属の首席通訳官サムエル・ウイリアムズ博士の日記『A Journal of the Perry Expedition to Japan』(1853-1854)も1910年に彼の子息によって編纂されている。この日記について、洞富雄訳著『ペリー日本遠征随記』の和訳がある。「ペリー提督日本遠征記」の和訳について、沖縄に関するものだけを収録した

ものに、大正15年出版の神田清輝訳著の『ペルリ提督琉球訪問記』、昭和37年出版の外間政章訳著『対訳ペリー提督沖縄訪問記』等がある。外間訳著本は英文と和文の対訳になっている。更に、同書は注記で沖縄独特の地名や役職名等に説明がなされており、読者に一層の理解ができるようになっている。

(とよひらともみ: 図書館専門員)

注1 Narrative of a voyage to Java, China and the Great Loo Choo Island;., and of an interview with Napoleon/ Basil Hall, London, 1840 (K290.99/HA)

注2 鎖国令下の琉球で外国人に対して交易の口実を与えない琉球王府の政策が窺える。

(照屋善彦執筆「十九世紀琉球の風俗」参照 『風俗史学』13号所収)

注3 外間政章訳著「対訳ペリー提督沖縄訪問記」(K290.99/PE)参照。p.47

注4 伊波月城執筆「ベジルホール琉球探検記」大正元年11月6日沖縄毎日新聞記事(マイクロフィルム)

注5 伊波月城執筆「ペルリー日記」大正2年6月16日沖縄毎日新聞記事(マイクロフィルム)

注6 大熊良一訳著『プロッサム号来琉記』(K290.99/O55)参照。p.95

注7 須藤利一訳著『異国船来琉記』(K290.99/Su14)の解説参照。p.439

注8 須藤利一訳著『異国船来琉記』解説参照。p.440

注9 外間政章執筆『ペリー提督の琉球遠征記』(南島史論所収)参照。200.4/R98

注10 外間政章訳著「対訳ペリー提督沖縄訪問記」(K290.99/PE)訳注者自序参照。



左: 首里城内(北殿)で交歓するペリー一行
『ペリー提督日本遠征記』1856年



右: 琉米修交条約(当館所蔵の写し)